

平成29年度 関西福祉大学金光藤蔭高等学校 学校評価報告書

1 めざす学校像

建学精神	：我々が天地の大徳によって生かされ、家族をはじめ多くの人々の祈りによって育てられていることの自覚と感謝の念から発して、その自分を大切に、将来世のお役に立つ人間となって、世界真の平和達成と文化の発展のために貢献し、そこに生甲斐と喜びを見出す人でありたいという念願に立って、教育の徹底を期する。	
教育方針	：「学理求道」 確かな学問と豊かな人格を備え、大局観に基づく課題認識を持って、社会に有用たる生き方を求める人材を育成する。その人材を輩出することによって本校としての社会的責任を果たす。	
組織目標	：① 生徒一人ひとりを大切に教育内容と進路保障で応える学校	⇒教育
	② 社会の変化や時代の要請に応じて、常に改革・改善し続ける学校	⇒経営
	③ 教職員一人ひとりの高い職業意識と組織力で業務遂行する学校	⇒組織
スローガン	：「学びの場で、夢にチャレンジしよう！」	

2 中期的目標

1 法人理念と教育目標の遡求
(1) 法人理念の徹底
2 教育内容の充実改善
(1) コース内容の充実・検証
(2) 基本的学力の向上
(3) 生徒指導の充実
(4) 進路指導の充実
3 学校組織活動の充実発展
(1) 学校組織の活性化
(2) 組織と業務を通じた人材育成
4 広報募集活動の充実強化
(1) 広報募集の強化
5 創立100周年に向けて
(1) 問題解決型・未来志向型の学校風土の醸成

【自己評価アンケートの結果と分析・学校評価委員会からの意見】

自己評価アンケートの結果と分析	
【アンケート】	○生徒 <平成30年2月実施> 授業内容を中心に学校生活全般について全校生徒に調査した。(16項目) ○教職員 <平成30年4月実施> 生活指導・授業評価・その他教育活動や学校改革(コース改編等)の成果について検証した。(16項目)
【分析】	○生徒アンケートではほとんどの項目で約60%以上の生徒が肯定的な反応を示している。 ○教職員による自己評価では、「6コース制になり、それぞれのコースが特色を生かした学習活動を実践した」と大半の教職員が実感している。また「校内研修や具体的な事例をもとにした問題解決型の業務を通して、教師力向上に取り組んでいるか」との項目でも80%を超える教職員が認識している。 今後も一人一人の生徒に寄り添った、丁寧な教科指導、生活指導を継続していきたい。
学校評価委員会からの意見 <平成30年4月26日開催> 学校評価委員 ①学識経験者：須田正信氏(大阪教育大学教授) ②学校近隣防犯委員：新居見英夫氏 ③本校PTA会長：藤原由美子氏	
○教育内容の充実改善について	○進路指導について
①コース内容の検証 6コースの内容の充実に努めている。エンカレッジコースでは、個別の教育支援計画等から関係部署と連携を取り進級へとつなげていた。トップアスリートコースでは、部の再編を行い努力しているのが伺える。	4年制大学進学率が35.1%と前年度の32.1%より増加しているなど若干の努力がみられる。進学も就職も希望しない生徒が2%おり、引き続き家庭との連携を深め、粘り強い指導を継続していく事が求められる。
②基本的学力の向上について 「基礎学力がついてきた」と答えた生徒が65%と前年度より若干増えている」とした報告があり、「学びたいむ」での取り組みの成果がみられる。また、「授業はわかりやすく、工夫がされている」ことに80%の生徒が満足を感じている報告に、努力した結果が伺える。	○学校組織について 生徒たちの学力向上や学校全体の活性化を促す教員の選考・任用を行うことでその成果がみられる。分掌・委員会の統合・再編がなされたことにより、それぞれの部単位の連携が図られることで業務が円滑に進める事が出来ている。
③生徒指導について 不登校を含む学校生活学業不適応や進路変更を余儀なくされる生徒について昨年より若干増えている事に対して、なお一層の打開策を講ずる必要がある。「ルールを守り、挨拶もきちんと行っている」と回答した生徒が90%あることは指導が功を奏している。	○広報活動について 中学生・保護者対象のオープンスクールや学校教員や塾向けの説明会も開催し、参加者も前年度より微増している事から努力がみられる。「エンカレッジコース」では外部にも積極的にアピールすることにより生徒確保につなげたり、ホームページでの刷新に努力している。
	○その他 引き続き、生徒への指導支援に努力と保護者との連携を深め、教職員全員が魅力ある学校づくりのために努力されたい。

3 本年度の取組内容及び自己評価

目標 中期的	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価
法人理念と教育目標の遡求	<p>(1)法人理念の徹底</p> <p>ア 本部参拝・本校感謝祭の充実</p> <p>イ 心の教育を意識</p>	<p>(1) 法人理念の徹底</p> <p>ア 学校行事として毎年実施している3年生本部参拝・2年生の感謝祭の充実を目指す。</p> <p>イ 式・行事での講話、学年・学級での指導、各種配布物等を通じ、天地・人・物への感謝、社会のお役に立とうという「心の教育」を行う。</p>	<p>ア 学校行事として70%以上の生徒が認識しているか。</p> <p>イ 式・行事や、学年・学級指導を通して70%以上の生徒が「心の教育」を実感しているか。</p>	<p>ア 73%の生徒が学校行事として認識している。3年生は全員が進路決定前に本部参拝を実施することで、「世のお役に立つ人間になる」との決意を新たにすることができた。感謝祭では参列した2年生全員が学校生活を見直し、感謝の気持ちを持って日々過ごすことを喚起できた。</p> <p>イ 全校生徒の70%が心の教育を実感していると認識している。式や行事の他、学年集会や日々のホームルームでの指導が生徒に浸透しているようである。引き続きホームページ等でもその内容を知らせていくようにする。</p>
教育内容の充実改善〔コース検証・学力向上・生徒指導・進路指導〕	<p>(1)コース内容の充実・検証</p> <p>ア 文理進学</p> <p>イ エンカレッジ</p> <p>ウ ITライセンス</p> <p>エ アートアニメーション</p> <p>オ ライフクリエイティブ</p> <p>カ トップアスリート</p>	<p>(1)コース内容の充実・検証</p> <p>本年度改称再編した6つのコースを安定・充実させる。</p> <p>ア 文理進学については、勉強合宿や様々な学力向上施策を実施して、内容の充実を図る。</p> <p>イ エンカレッジについては、入学前面談や個別教育支援計画の作成等に力を入れて、指導の充実を図る。</p> <p>ウ ITライセンス・アートアニメーション・ライフクリエイティブについては、専門学校との連携を進め、内容を充実させる。</p> <p>オ ライフクリエイティブについては、コースの改編を成功させる。</p> <p>カ トップアスリートについては、6強化クラブの安定と次年度募集。</p>	<p>ア 勉強合宿や様々な学力向上施策の充実を図って、参加する環境作りに努める。</p> <p>イ エンカレッジコースの生徒の90%以上を進級させる。</p> <p>オ ライフクリエイティブのスペシャリティーとディスカバリーをスムーズに始動させる。</p> <p>カ 6強化クラブのうち3クラブは全国レベルの大会に出場できるよう実績アップを図り、次年度募集へつなげる。</p> <p>カ サッカー部の再構築を図り、女子バスケットボール部の新設の準備をすすめる。</p>	<p>ア 文理特進では1・2年生の全員が春・夏の勉強合宿に参加した。文系・理系に分かれての特化した授業を実施し、特に理系希望の生徒のための特別講座や受験指導にも力を入れた。</p> <p>イ エンカレッジコース新設1年目、個別の教育支援計画、個別の指導計画を立て、担任を中心に関係部署と連携を取りながら、家庭の協力もあり、生徒の93%が進級することができた。</p> <p>ウ アートアニメーションクラスは大阪アニメーションカレッジ専門学校の連携を強化し、より充実した授業が展開できた。「アートアニメーションコース」として独立させることによってより特化した内容になっている。</p> <p>オ ライフクリエイティブコースは2年次よりスペシャリティークラスを編成し、協力校である辻学園、NRB日本理美容専門学校との連携を強めた。</p> <p>カ トップアスリートコースは、女子ソフトボール、男子バスケットボール・男子バレーボール・男女柔道が近畿大会、女子ソフトボール部は全国選抜へも出場した。3学年とも2クラス編成となり、30年度の募集も安定が見込まれる。</p> <p>カ 平成27年度に募集を始めた女子サッカー部であるが、3年経過してもチーム構成人数に満たず、30年度から募集停止とする。引き続き残った部員たちの指導に努め、他校との合同チームで試合に参加できるようにサポートしていく。また女子バスケットボール部新設(31年度)に向けて、生徒募集の準備を進めている。</p>

<p>(2)基本的学力の向上 ア 全生徒への基礎基本の徹底 イ 学習意欲のある生徒へ特別対応 ウ 研究授業の実施 エ 生徒の授業評価</p>	<p>(2)基本的学力の向上 低学力の生徒が多い。在籍者全体の基礎的学力底上げと進学希望生徒の学力アップを図る。 ア 基礎学力指導(HR)や学習方法の充実・工夫に力を入れる。 イ 外部機関や人材を活用した学習場を質量ともに拡充する。 ウ 授業改善や授業力向上に向けて研究授業等に取り組む。 エ 生徒による授業評価を授業改善に活かす。</p>	<p>ア 7校時に設定した「学びたいむ」、リクルートのスタディサプリの利用に関しての生徒たちが基礎学力向上の効果の実感を70%以上感じているかどうか。 イ 時間割以外の学力向上施策として、教員による進学講習や塾講師の特別講習、藤蔭塾(放課後の自学自習サポート教室)の満足度70%以上を目標にする。 ウ 教諭・常勤講師の中で各教科1名が研究授業を実施する。公開授業を年間2回の期間を設けて実施する。 エ 教諭・常勤講師全員が生徒による授業評価を年間2回実施して分析する。</p>	<p>ア 「学びたいむ」では各学年・コースごとに生徒の学力に合わせた学びなおし教材を工夫し、「基礎学力がついてきた」と答えた生徒が65%と前年度の63%より若干増えている。今後も3年間を見据えた取り組みを計画し、生徒の70%が達成感を感じるような教材の選定、授業を継続させていく。 イ 放課後に実施した特別講習を受講した生徒の全員がその内容に満足している。また自学自習サポート教室の藤蔭塾も大学生のアシスタントが教科のみならず、小論文や自己推薦書等の指導もサポートしてくれたことで生徒たちの学習意欲を高める一助となった。 ウ 公開授業・研究授業の実施後各教科で検証し、授業改善につなげた。今後も継続していきたい。 エ アンケートで「授業はわかりやすく、工夫がされているか」との質問に80%の生徒が満足を感じている。しかし、科目別担当者によっては課題が残る授業評価もみられたので、アンケート結果を教科内で共有し、教員一人一人の課題克服につなげていきたい。</p>
<p>(3)生徒指導の充実 ア 生活・学習習慣の確立 イ 生徒間のトラブルや、生徒指導案件の改善 ウ 人権侵害事象の根絶 エ 挨拶・マナー等の徹底</p>	<p>(3)生徒指導の充実 ア 転退学者数の改善を継続して行う。「3年間お預かりして育てる」「社会のよき構成員として世に送り出す」という使命感を大切にす。 イ 高校生らしい友達関係の構築が難しいケースがある。コミュニケーション能力を高め、望ましい対人関係を身に付けさせる。 ウ 社会規範や行動に対する判断が難しい生徒が多い。生徒間の人権侵害事象は起こさない。 エ 服装の乱れや挨拶ができない生徒が多い。登下校時、ホームルーム、授業開始・終了時の挨拶習慣化とともに、外来者に対する挨拶を励行させる。</p>	<p>ア 転退学者を昨年度の53名から29年度は40名未満に改善する。 ウ 人権侵害事象はゼロを目指す。 エ 望ましい服装・髪色・身だしなみや、挨拶を徹底させる。</p>	<p>ア 平成27年度転退学者が45名(転学13・退学32)28年度が53名(転学25・退学28)そして29年度が54名(転学21・退学33)と40名を切ることができなかった。転退学者の60%は「不登校」を含む「学校生活学業不適応」や「進路変更」が理由であり、昨年より若干増えている。本校の入学生の多くが小学・中学時に家庭的、経済的、学習的に多くの課題を抱えている背景があることは否めない。アンケートで「生徒の心身の悩みに先生が丁寧に対応しているか」という質問には83%の生徒が肯定しているが、生活習慣未確立や学習習慣のない生徒の自尊感情の醸成にさらに力を入れ、出席状況や授業態度の改善に取り組んでいく。 ウ 人権侵害事象は一切なかった。 エ 90%を超える生徒が「ルールを守り、挨拶もきちんと行なっている」と答えている。いろいろな場面での挨拶指導が浸透してきていると思われる。さらに徹底した指導を継続していきたい。</p>
<p>(4)進路指導の充実 ア 進学実績の向上 イ 望む職業への就労実現</p>	<p>(4)進路指導の充実 ア 大学・短大・専門系学校への進学実績の向上させる。 イ 卒業段階での未進学者・未就労者の数を減らす。</p>	<p>ア 四年制大学進学率を前年度よりアップさせる。 ア 大学・短大・専門系学校全体の進学者も前年度よりアップさせる。 イ 未進学・未就労率を0にする。</p>	<p>ア 全体の進学率は平成28年度の71.7%から69.0%と若干減少した。しかし四年制大学進学率は32.1%から平成29年度35.1%へと増加した。最後まであきらめずに努力する生徒への進学指導を丁寧に行った。 イ 進学希望者の中での未決定率は0.8%から1.6%と若干増えている。(浪人希望者を含む)就職希望者の中での未決定者は0.8%から0%になった。しかし、進学も就職も希望しない生徒が2%おり、今後も家庭との連携を深めながら、進路未決定者0を目指し、粘り強い指導を継続していきたい。</p>

学校組織体制の改善	(1)学校組織の活性化	(1)学校組織の活性化 ア 組織的・機動的な学校体制の確立 教科指導やクラブ指導には専門性が必要、学年や分掌組織は組織力・機動力・実行力が必要である。それぞれが、連携を密に活発な業務活動を展開する。	ア 慎重な講師任用や適性を配慮した人事配置を行う。平成27年度から統合、再編を進めた分掌組織を活発に機能させる。	ア 将来にわたり積極的に本校での教育活動を推進しようとする常勤講師を対象に、準専任教員選考試験を平成29年度より実施し、5名の内1名の教員を選出した。今後は生徒募集はもとより、生徒たちの学力向上や学校全体の活性化を促す教員の選考・任用を継続して行っていく。また平成27年度に分掌・委員会の統合・再編がなされ、教務学事系4部、総務企画系3部の計7部がそれぞれに機能し、連携を取り合って円滑に業務を進めた。なお、教職員の適性・能力に応じた校内人事や校内分掌が行われているかについてのアンケートでは概ね70%の教職員が肯定している。
	(2)組織と業務を通じた人材育成	(2)組織と業務を通じた人材育成 ア 管理職や分掌組織の組織的業務を通してミドルリーダーを育成する。 イ 課題山積の学校である。様々な学校課題を提示して、課題解決型の業務を展開し、学年部長・分掌部長等を活かして、OJTで育てる。	ア 管理職や校務運営委員会メンバーを含めてミドルリーダーの層を厚くする取り組みを行う。 イ 重要な学校課題を提示して、課題発掘・解決型の業務を実践させる。 ウ 教諭・常勤講師と様々な場面で時間をかけた会話をを行う。	ア 上記のように7部に発展することでラインの仕事を意識させる分掌長、副分掌長が増加した。また平成27年度より教頭補佐を置き、学校運営の要を担う人材を育成している。 イ 新任を含めた常勤講師には学年部長や分掌長が中心となり生活・学習指導、学校業務に関する細かい指導を行った。ミドルリーダーはまた日々の業務から重要かつ、最優先の学校課題を見つけ出し、速やかに改善策を考え実践するよう努めた。教員の73%がその取り組みを認識している。また研究研修部が様々な校内・校外研修を提示し、若手教員も積極的にそれに参加し、自己研鑽力を高めている。
広報募集活動の充実強化	(1)広報募集の強化 ア 組織的な広報展開 イ 外部広報のアピール力アップ ウ 入学生徒の確保	(1)広報募集の強化 ア 入試広報部の組織的な広報展開 イ 外部広報のアピール力アップ ウ コースの改称再編に併せて、ホームページや学校案内・冊子等を生徒・保護者・中学・塾等に受け止めやすい、わかりやすい表現に改善する。 ウ 入学生徒の確保 平成30年度入学者を増やす。本校を対象とする生徒層を本校の「学校体制」と「教育内容」で3年間育て上げるとすることで、生徒・保護者・中学・塾等の外部評価を得る。	ア 平成27年度途中にスタートさせた入試広報部の組織活動を充実させる。中学校長経験者4名と事務職員1名を含めた入試広報部が人材を活かした広報展開を行う。 イ 利用しやすいホームページ、わかりやすい学校案内に刷新する ウ 平成30年度入学者を目標300名として、最低でも280名以上とする。	ア 中学生・保護者対象のオープンスクールを3回、入試説明会を4回、中学校教員や塾向けの説明会もそれぞれ実施した。学校紹介、各コースの体験授業にも改良を加え、参加者は前年度より微増している。 イ 進学コースの「文理特進」の名称を「文理進学」と変更した。また「メディアアートクラス」を「アートアニメーションコース」として独立させ、「ITライセンスコース」と分けることで特色を明確に打ち出し、生徒確保につなげた。また「エンカレッジコース」を2クラス編成でスタートさせ、「体験」と「学びなおし」をコンセプトとして外部にも積極的にアピールし、生徒確保につなげた。ホームページは中学生や保護者によりわかりやすい内容やデザインに刷新した。 ウ 平成28年度入学生は282名、平成29年度入学生は297名、平成30年度入学生は255名と前年度を大きく下回った。来年度に向けて、「文理進学コースの理系展開をなくし名称を変更する」「エンカレッジコースの募集枠を拡大する」「入試形態を見直す」など、生徒確保のために、教育内容の充実・改革を図る。
	創立100周年に向けて	(1)問題解決型、未来志向型の学校風土の醸成	(1)大局観による未来志向型の学校風土 10年先に向けて連帯して問題解決にあたる学校風土を醸成する。	様々な学校課題に連帯感をもって、前向きに取り組み、学校の一体感を醸成する。